

I. 建築という観念の成立

I. architecture の語源

architecture ← architectura ← architectonice (architectonice tectone の略) = **architectone** の **techne**(術)

- ① **architectone** とは
 - ・ arche: 初源・原理・首位・頭
 - ・ tectone: 工匠・職人
- architectone(建築家) =
 - ・ 原理的知識を持つ
 - ・ 職人たちの頭
 - ・ 技術を統べる

② **techne** とは

techne(術) ≒ **technics**(技術) = [ラテン語] **ars**
<古代> **ars** → <現代> **art**(芸術)
ギリシャ人に **techne**(技術) と **ars**(芸術) の区別はなかった

2. プラトンの製作理論

① **イデア**: 万物、あらゆる存在の本源

分有・模写することで全ての知覚しうる事物は現実の存在者となる
Ex. 樹木

② 人間の制作能力: 像・形相・表象の作り方

(1) **elikastike** (実像を作る術): イデアを直接模写 → ものそのものを造る方向
第一模写: 音楽・建築・器具

(2) **phantastike** (仮像を作る術): 神がイデアを模写して造った形象を phantasma (心象) の助けを借りて、さらに模写する方向

第二模写: 絵画・彫刻

Ex. 寝台の区分

3. アリストテレス: プラトンの制作理論の発展

mimetike techne (模倣芸術): 絵画・彫刻・詩は単なる第三段階の模写ではない
上記(1)・(2)は同列である

しかし、建築 = architectonice tectone ≠ mimetike techne

II. 建築造形の原理

1. タクシス(秩序)

taxis (秩序): 神の制作に属する自然でも人間の制作に属する事物でも原因として秩序を想定

2. シュムメトリア

・タクシスを特に**数学的**且**量的**に理解した際の呼称
・形あるものの**製作**や**造形**において核心的な原理 → あらゆる美にして善なる存在者に普遍的

3. アリストテレスの三原理

美の主要な形相: 「タクシス・シュムメトリア・ホリズメノン (限定)」と示唆

存在者に**知覚される**には → **限定される必要がある** → **タクシスは限定を可能**とした

(ギリシア人は無限定を許さない)

疑問と解釈

I. 建築という観念の成立

1. architecture について

「ギリシャ人に **techne** (技術) と **ars** (芸術) の区別はなかった」

→ 言語学的な結論付け

Q 観念的な区別もなかったのだろうか

2. プラトンの制作理論について

Q1 そもそもどのように制作理論が生み出されたのか

Q2 “イデア”はなぜ定義されたのか

Q3 上位概念、下位概念を作り出さなければならない理由

A

・プラトン…哲学者。ソクラテスの弟子、アリストテレスの師匠

・イデア論を定義

「本当にこの世に実在するのはイデアであって、我々が肉体的に感じている対象や世界とはあくまでイデアの《似像》にすぎない」(Wikipediaより)

・子弟関係の流れでイデアは生まれた

<ソクラテス>

倫理的な徳目についてそれが「何であるか」を説いた。

<プラトン>

ソクラテスの問いに答えるような「**まさに〜であるもの**」「**〜そのもの**」の存在としてイデアを想定した。またイデア抜きにして確実な知はありえないとした。

・イデア論の中の「感性論・芸術論」にて左記②を提唱

イデア論では数学・魂論・天文学・倫理学・政治学など様々な分野について言及している。感性論・芸術論はその中の一つとして取り上げられている。

→ **感覚は不完全**なもので、正しい認識を得られない。そのため芸術はイデアの模倣にすぎないとして芸術を低く評価した。

II. 建築造形の原理

I. 古代ギリシアの「善」とは何か

「善は**美**や**有用性**と同一視」(ソクラテス)

「善は存在の根拠、**美**や**真**の原理」(プラトン)

「人間における善を**幸福**とし、全て現実的なものは善であり、善は個物の**類的本質の実現**にある」(アリストテレス)

「社会的慣習に束縛されない自由を志し、芸術や学問をはじめとする特定の目的を放棄することを**徳**とした」(キュニコス派)

↓

「我々の意思を満足させ、積極的な価値を持つものが「善」として判断されるとすればイデアのような存在の本源があるからこそその「善」であると解釈。むしろ、善はイデアの本源を秩序立てているものではないだろうか。

しかし、「善」とよく似た「徳」は、用・真・美とはかけ離れた考え方があり、善の存在の根拠を否定する可能性があるのではないかと推測」

(出典 ブリタニカ国際大百科事典 小項目事典ブリタニカ/ https://kotobank.jp)